

小林市立小林小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語科においては、読み取る力、書く力の落ち込みが見られ、筋道立てて読み書きすることが苦手であることから、読解力及び思考力を培う指導が必要である。社会科においては、社会事象に関する知識の不足が見られる。算数科においては、計算など形式的な問題には強いが、数量関係など思考を要する内容に弱い傾向が見られたことから、計算力の一層の定着を図るとともに、文章問題に十分触れさせる必要がある。理科においては、自然に恵まれた地域であるにもかかわらず、身近な自然事象への関心が薄い傾向が見られることから、身近な事物現象と関連させる教材を使ったり、学習事項を応用する場面を設けたりする必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

テレビやゲームに費やす時間が長い傾向にある。学習の時間は、ほぼ県の平均の時間を確保しているにもかかわらず、それが学力に反映されているとは言えない。

学びの基礎力では、友人と外で遊ぶことや読書についての基礎体験が不足している。また、集中した学習への取組や学習の準備やわかりやすく話すといった点の意識が十分でない。

生きる力については、規範意識が下回っている。また、自己を見る眼が十分に育っていない。このことから、日常生活の中で自己有能感を持たせるような機会を数多く与えていく必要がある。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校では、2学期制を生かした確かな学力の育成を目指して、以下の経営方針で取り組んでいるところである。

- 各教科や総合的な学習の時間における体験的・問題解決的な学習の充実を図ることで、自ら学習に取り組む姿勢を培う。
- 習熟度または個に応じた学習支援、読書指導、学力テストの結果の活用、サマースクール等を実施し、読み・書き・計算等の基礎的・基本的な学習内容の定着を図る。
- 教師の授業力向上を図るために、「授業力向上」「指導技術」「教育理論」等の研修を行い、各学年ごとにテーマを設定した「積み上げ方式」による授業研究を実施する。
- 家庭学習の手引きを利用し、それぞれの学年の発達段階に応じた学習の仕方を身に付けさせるとともに、間違えた内容をできるまで繰り返し学習する習慣付けを図る。

(2) 教育課程内の取組

① 校内研修の充実

本校では、国語科を中心とした「読解力育成のための授業及び学習態度の改善」を目指した研究を行った。特色としては、「学年別授業研究」と「積み上げ型の授業実践」である。「学年別授業研究」は、児童の発達段階や学習内容等に留意しながら、学年別に課題を設定し、授業研究を核とした研究及び実践を推進することにした。「積み上げ型の授業実践」は、教師の指導技術を高めることによって授業の質的改善を図り、学年ごとの課題解決を目指した授業研究の手法である。これは、研究授業を実施する際に事前に各学年の担任全員で順次模擬授業を行うもので、全ての担任が同一領域・同一単元・同一段階の授業をそれぞれの学級で行い、その都度工夫・改善のポイントについて検討を加えながら、より効果的な授業の在り方を究明していくというものである。

また、主題研究の他に、教師の授業力向上を図るために、「授業力向上」「指導技術」「教育理論」などの情報を職員に提供し、日々の授業に生かしてもらっているところである。

(3) 教育課程外の取組

① 学びタイムの活用

読み・書き・計算は学力の根底をなすもので、授業以外の場面で繰り返し練習を行うことにより、一層基礎・基本の定着を図ることができる。本校では、この時間を「学びタイム」と名付け、基本的に毎週木曜の朝の活動時間に実施している。

この「学びタイム」の活用の一例として、全校一斉漢字大会を実施した。児童一人一人に目標を持たせることで学習意欲の喚起と漢字に対する基礎的な力の向上をねらったものである。実施内容については、学びタイムの第1・2週目に学年単位で漢字の練習を行い、漢字大会に向けて漢字力の定着を図った。また、年間指導計画作成時に生み出された余剰時数(年間10時間)を活用して、習熟を図るための時間に充てたり、同一日に全校一斉の漢字大会を行ったりした。

② 読書活動の推進

毎週月・水・金曜日を「読書活動」とし、読む力の育成を目指している。また、週に1回ボランティアの方々による読み聞かせを昼休み時間に行い、読書への親しみを高めるよう工夫している。その他の手立てとして、1か月に自分が何冊の本を読んだかを把握し、読書の励みとなるように、図書委員会から提案された「ぶっくんカード」を活用している。

③ 単元テストの分析と活用

児童の実態や変容をより系統的に把握するねらいから、全校で教材会社を統一して採用した。添付の個人別学力到達度診断ソフトを活用し、個人の観点別達成状況や単元ごとの到達度状況を細かく把握するとともに、学級・学年の傾向もつかむことができた。

また、結果については、朝自習の時間や授業中の習熟・復習の時間及び家庭学習などで活用する補充・発展問題を作る際の参考にすることができた。さらに、児童の実態をもとに習熟度別授業を行ったり、個に応じた指導を行ったりすることもでき、家庭訪問や個人面談の際には、資料の一つとして、個人別学力診断シートを活用した。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 地域及び保護者への発信

学校と家庭が連携しながら、児童一人一人に基礎的な学力を身に付けさせることをねらい、本校における学力向上の取組に関する事項を「学校の広報誌」「学年通信」「学級通信」で、地域及び保護者に発信した。

② 家庭学習の充実

学習内容を確実に身に付けるためには、授業で学んだことを家庭においても復習する必要がある。そこで、本校では、各学年の発達段階を考慮して「家庭学習に関する手引き」を作成し、家庭での時間の使い方を工夫して学習時間を確保してもらい、家庭学習の習慣化を目指している。また、「早寝・早起き・朝ごはん」を合い言葉として、基本的な生活習慣の育成を各家庭にお願いしているところである。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 学年別研究への取組及び積み上げ型の授業実践によって、教師個々がより主体的に授業研究に取り組むようになり、授業の質的改善が見られた。
- 全校一斉漢字大会や朝自習の取組によって、読み取る力の基礎となる漢字力を身に付けようとする児童の意欲が高まった。
- 家庭への資料の配付や説明会の実施等の取組が、児童の学力向上に対する意識の啓発につながった。

(2) 課題

- 基礎的・基本的な学習内容の確実な定着と同時に、応用力・思考力・イメージ力を培っていく必要がある。